

第2回 河川水辺の国勢調査改善検討委員会 議事概要

日 時：平成23年2月22日（金）10時30分～12時45分

場 所：経済産業省（別館）9階 944会議室

■議事要旨

● ユーザーアンケートに関する意見等

- ・ 河川水辺の国勢調査と、工事直前の生物調査などの国土交通省の他の調査との組み合わせを一層的確に行うことにより、合わせた調査費を削減できる余地があるのでは。
- ・ 河川管理者用アンケート結果では、底生動物、プランクトンはあまり利活用されていないとする回答も多い一方、コスト縮減のために回数を減らしたり地区を減らしたりすべきでないとの意見が多い。これらの回答の解釈を検討する必要がある。
- ・ プランクトン調査に関する河川水辺の国勢調査でマニュアルが、他の目的で行われるプランクトン調査でも用いられている。これは、河川水辺の国勢調査が統一的手法で行われていることの効用であり、研究者にとっても効能が大きい。
- ・ NPO、野鳥の会への調査協力依頼を進めると良いとの意見が多いが、現状では期待すると精度が問題となる。野鳥の会自体が弱体化しており、引退した人が多い。研究能力が期待できない NPO 法人もある。このような施策を進めるのであれば、NPO 等を育てていく施策も合わせて考慮する必要がある。
- ・ 河川水辺の国勢調査の結果の活用は、魚類が多くて底生動物が少ないと予想していたが、アンケート結果からは意外に全分類で使われていることがわかった。事業者として重要種や有用種のデータを使っていることが多いが、魚類、底生動物などは点的データであり、工事実施箇所がその地点から離れている場合が多い。重要種が近傍の河川水辺の国勢調査の調査地点にいる場合には、工事の事前にその重要種の確認調査をしているだろう。そのあたりのプロセスがわかれば事業への活用のイメージができる。アンケートから分析できないか。
- ・ 定量調査は瀬だけで行うのに対して、定性調査は瀬、淵等の様々な場毎に行う必要があるため手間がかかることを反映して、個別のアンケート意見では、定量採集は良いが定性採集は負担が大きいとの意見があったのではないかと思う。国の直轄区間においても、止水域等で重要種のタガメ、ゲンゴロウ、コオイムシ、トンボの幼虫等が生息しており、定性調査を行う意味はあるが、調査方法の工夫による効率化の方向は考えられるのではないか。
- ・ 河川水辺の国勢調査データをどのように使ったら良いか、そのためには同定等をどこまで細かく見る必要があるのか、群集の分析を指向するのか、個別種の分析を指向するのかといった出口対応をどう考えるのかといった点について、

研究者でも示せていないしスクリーニング委員会でも議論できていない。ただし、この調査自体が全体として日本の生態系を調べるというインベントリーの意味もあるので、それもふまえた上で全国的な変化もみる等、個別の議論をする必要がある。研究者の方も3巡目になってデータ蓄積があり、WebGISの利用、マクロ的解析など、未だやっていない領域に入っていき、これから使われる可能性が十分ある。

- ・ 環境基図の現場での活用状況について確認する必要がある。
- ・ ダム湖動植物プランクトンは5年に1回のサイクルである。プランクトンはターンオーバーが短く地域ごとに異なるため、5年は長く一律すぎないか。見直す際には水質と動植物プランクトンは同時に行うと効果的・効率的。
- ・ 次回委員会に向けて、コスト縮減を議論するためには、どの項目にどのくらい費用がかかるのかを示して頂く必要がある。
- ・ アンケート結果では、河川管理、工事の活用では貴重種が多く挙げられている。外来種駆除は本来の河川管理目的でなく、治水事業の中で位置づけられていないからか活用の度合いが低い。

●他調査との連携・調査見直し方針に関する意見等

- ・ 特に両生類・爬虫類・哺乳類は、河川だけではなくバック（その周辺）を利用している種が多いため種の絞り込みには検討が必要。国交省として調査結果をどう利用したいのかが重要で、それがわかれば種の絞り込みができるのでは。
- ・ 河川水辺の国勢調査は、国交省では基本的に河川管理、改変に使われると思うが、もう一つは、生物の生息地としての河川をどのように評価するかという点もあると思う。例えば環境省のモニタリングサイト 1000 はラムサール登録候補地の検討に使われている。今後、国交省としてどのようにデータを外部に出そうとしているのか。
- ・ →河川水辺の国勢調査結果は、渡良瀬遊水池のラムサール登録でもベースとして使われている。また、調査結果を広く社会還元するため WEB-GIS、データベースの公開等、活用度が高いものにしたい。
- ・ 河川水辺の国勢調査を河川法の中でどう位置づけるのか。河川を生物多様性の場としてみるのか。水辺だけということであれば、調査を絞るやり方もあるだろう。他調査との重ね合わせでは田んぼと緑の国調があったが、緑の国調は今は河川でやっていない。同じ生物群で各調査の調査手法の違いを確認しておくとうい。
- ・ 他省庁との連携もあるが、国交省の他調査でも連携しているところとできていないところもある。国交省の中でデータを別々にとるのは非効率であるため、例えば水質調査と河川水辺の国勢調査のプランクトン調査を連携・一体化するなど、他の事業調査、河川水辺の国勢調査の両方とも利活用できるような効率的見直しを行うべき。

- ・ 4 巡目の調査が終わっていない分類群（陸上系）で、調査方法が途中で変わると前のデータが使えなくなり、データの一貫性がなくなる。
- ・ 個別事務所だけでなく、地方整備局、本省が広域データの観点から分析し保全戦略を立てる使い道があるのではないか。空間スケールの視点から使い方が違うのでは。
- ・ データをとること以外に精度確保、データベース化に力をいれてはどうか。スクリーニング委員会だけでは精度確保は不十分。プランクトンについては、各事務所から上がったデータは分類精度（属レベル、種レベル）がまちまちであった。データベースをまとめるのがどれくらいできるのかが大変と認識している。
- ・ アンケートにもあったが標本管理が重要。現在はどうしているのか。（事務局：2年間保管しているが、博物館で有効活用することも検討中と回答）
- ・ データベースに関して年毎の検索、分類群毎の検索等データベースの検索がやりづらい。また生態学術で使われている GIS の標準である Shape ファイルでないと使いづらい。